



# 文化財ニュース

## No.46

発行 加古川市教育委員会 加古川市平岡町新在家1224-7  
編集 文化財調査研究センター 電話 23-4088  
<http://www.city.kakogawa.hyogo.jp/kyoui/321900/>

## 薬師如来坐像、両脇侍像3体彫刻

加古川市の指定文化財に、志方町・佛性寺の仏像と、加古川町・鶴林寺の仏画の計2件が、新たに選ばれ

ました。

これで加古川市の指定文化財は合計44点となりました。

佛性寺

志方町原



市の指定文化財に選ばれた薬師如来坐像(中央)と日光菩薩像(右)、月光菩薩像(左)

市指定文化財に仏像1件と仏画1件

佛性寺の本尊である薬師如来坐像は、<sup>いちぼくわりはぎづくり</sup>一木割斲造という技法で造られています。高さが163センチあり、市内でも大きな仏像です。

右手は5指を広げ、左手に薬壺<sup>やっこ</sup>を持っています。体部には金箔<sup>きんぱく</sup>を張り、衣部はえび茶色のベンガラ漆塗りとしていますが、これらの彩色は江戸時代の修理の際のものと思われます。穏やかな顔立ちや浅い衣の襷<sup>ひだ</sup>の表現、薄く感じられる側面感など、平安時代後期の特徴を持っています。

左脇侍の日光菩薩像は、高さ153センチの立

像です。左手を上げ、右手を下げて、手には日輪を持っています。頬<sup>ほお</sup>の張るふくよかな顔立ちとほっそりした体部に、平安時代後期の特徴が出ています。

右脇侍は、月光菩薩像です。高さは153センチあり、一木造りです。右手を上げ、左手を下げて、手に月輪を持っています。日光菩薩と同じように、平安時代後期の特徴を備えています。

平安時代の3尊像がそろって残る例は県下でも少なく、貴重な仏像であると言えます。

※『両界曼荼羅図』は2面に

# 両界曼荼羅図2幅(絵)

## 鶴林寺

加古川町北在家

りょうかいまんだらず  
両界曼荼羅図は、平安時代に弘法大師空海が日本に伝えた仏画で、大日経に基づく胎蔵界曼

荼羅図と金剛頂経に基づく金剛界曼荼羅図を合わせたものです。

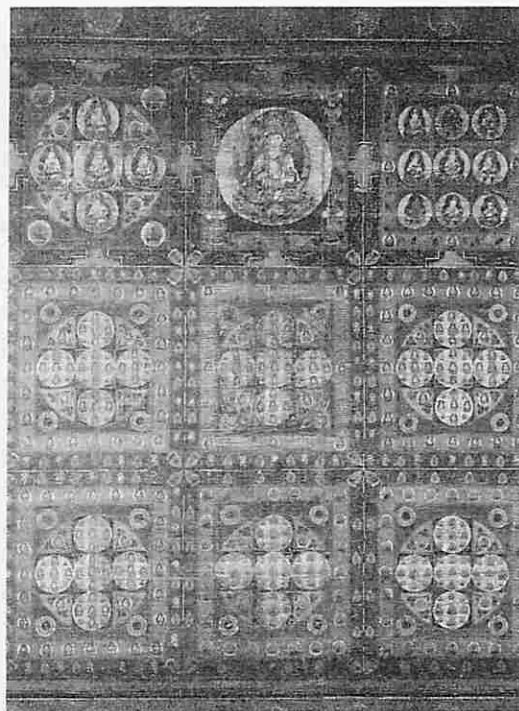


胎蔵界曼荼羅図

本図は、絹本着色で縦171㍍、幅132㍍の大きさで、特徴から室町時代の作品と考えられます。両幅とも傷みがありました。平成14年に鶴林寺により修復が行われました。

なお、画面裏に森石<sup>もりいわ</sup>見守<sup>みのり</sup>内方の逆修(仏事)のため、奉納された旨が記されており、また元禄13年(1700)に修復したと記されていますが、石見守がどのような人物であったかはよく分かりません。

また、本図がどのような目的で使用されたのかについても、鶴林寺に記録はないということです。



金剛界曼荼羅図

**両界** 密教の金剛界と胎蔵界。

金剛界は、大日如来の知徳の方面を代表する。如来の知徳は堅固で、すべての煩惱を打ち破る力を持っているので金剛という。

胎蔵界は、大日如来の理の代表。仏の菩提心を母の胎内にたとえ、大日如来の慈悲が衆生に及んでいく過程を説き示したもの。



県指定・阿弥陀三尊来迎図(神吉常楽寺)



県指定史跡・西条廃寺



市指定・神吉八幡神社祭礼絵巻



県指定・沙弥教信頭像(教信寺)

文化財シリーズ  
テレホンカード

# 泊神社と武蔵・伊織

宮本武蔵がNHKの大河ドラマで放映され、武蔵をめぐる話題が注目を集めています。

最近、宮本武蔵の生地は、加古川市のお隣の高砂市米田町であるという説が有力になってきているようです。武蔵自身も、著書の『五輪書』の中で播磨出身であると書いており、播磨生誕説はほぼ間違いのないようです。このような

武蔵播州生誕説の中で注目されている史料の1つに、加古川市の泊神社にある棟札があります。

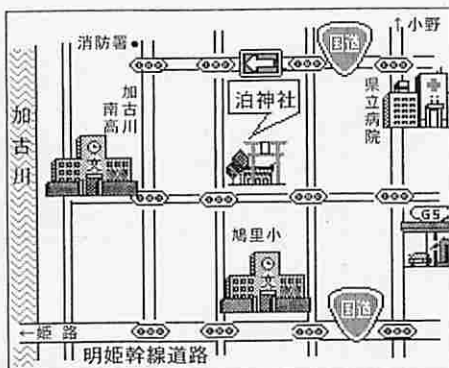
泊神社の本殿は、承応2年(1653)に宮本武蔵の養子

となった宮本伊織が寄進したものとされています。神社には当時の棟札が残されており、次のような記述があります。

「伊織の祖先は赤松氏の一族であったが、田原と改姓し、播州印南郡米墮村(現高砂市米田町)に移り住んだ。天正年間、作州(美作、現在の岡山県北東部)に神免



泊神社拜殿(加古川町木村)



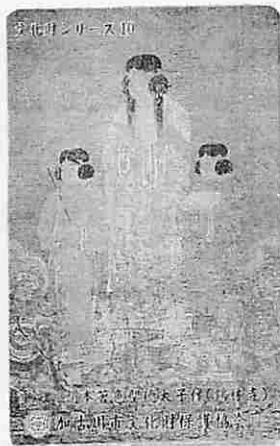
という者がいて、子が無かったため、武蔵玄信が養子となり、その後宮本と改めた。その武蔵にも子が無かったため、伊織が養子となった。そして、小笠原家の家老となった伊織が同社の荒廃を嘆き、兄弟たちとともに再建した」

このように、宮本武蔵は養子となって作州に住み、その後現在の高砂市米田町から伊織を養子に迎えたことになっています。

社殿を再建した伊織は、三十六歌仙図絵馬や石灯ろうなどを寄進し、同社の再興に努めました。これらは現在も泊神社に残されています。みなさんも一度、訪ねてみてはいかがでしょうか。



泊神社本殿の棟札



重文・絹本着色 聖徳太子像(鶴林寺)

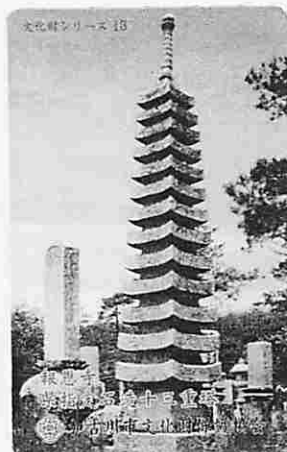


市指定・三十六歌仙図絵馬 紀貫之(泊神社)

### 国指定史跡・行者塚古墳



加古川市文化財保護協会



県指定・石造十三重塔 (報恩寺)

テレホンカード

各700円

購入ご希望の方は  
『文化財調査研究センター』へ  
(総合文化センター東棟2階)



## 泊神社の文化財

加古川町木村にある泊神社は、社記によれば神代に伊勢神宮の御神体の一つである御鏡がここに泊まり着いたことから始まったといわれています。祭神は、天照大神あまてらすのおおかみ、国懸大神くにぬりごのかみ、少彦名神です。社殿は、承応2年(1653)、宮

本武蔵の養子となった宮本伊織により寄進されたものです。その後昭和54年(1979)に拝殿を改築していますが、本殿は伊織が寄進した当時のものといわれています。南北朝時代の石弾城いしはじきじょうのものと思われる石垣や、宮本伊織寄進の市指定文化財の三十六歌仙図絵馬、花コウ岩製の灯ろうが残っています。

## 三十六歌仙図絵馬

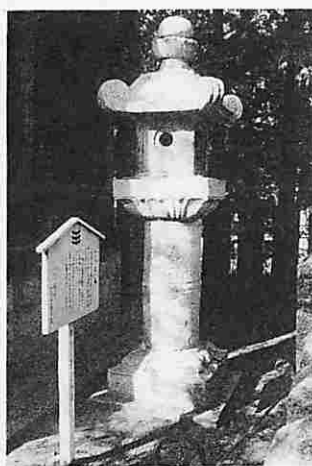
絵馬は、近世以降になると、その図柄は馬に限らず人物や物語など多彩になりました。祈願や返礼のために寺社に奉納される扁額で歌仙図は和歌の上達を願って奉納することが多かったといわれ、この付近では泊神社のほか、高砂市の米田天神社、小野市の垂井神社にもあり、いずれも承応2年(1653)に京都で作られています。

絵馬の裏書には、宮本伊織貞次と舎弟の小原玄昌が願主となつて奉納した三十六歌仙図であることが記されています。歌仙絵は、狩



三十六歌仙図絵馬・中納言家持

野探幽の門弟と称する甲田重信がすべて描いていますが、歌については数人の筆によっています。



## 伊織寄進の石灯ろう

神社本殿の裏に3基立っています。1つは八葉蓮弁反花はちようれんぺんはんかの上に中央節付円柱ちゅうさうせつづいゑんちゆうの竿を立て、蓮弁請花付角中台れんぺんうけななみづか、角火袋かくかひぶくろ、四隅蕨手笠しよぐもくろしや、さらに蓮華付宝珠れんげふくぼしゆを載せています。全体としては謹直端正な造りで、竿部に「承応二曆三月吉日(1653)」の銘文があります。高

350年ほど前、泊神社の近くの土橋の下に竜が住んでいました。この竜は神社へ参拝に来る人々を脅かすため、みな困り果てていました。

泊神社を再建した宮本伊織は「この竜をなんとかしなければ」と思い、絵師の狩野探幽の弟子である甲田重信に相談しました。重信は「名案がある」と言って、神社の18畳の天井一面に玉を奪い合う雌雄の竜を描きました。これで大丈夫——と思われたのですが、竜の被害はおさまりません。

これを聞いた師匠の探幽は、自ら泊神社へ出かけ、重信の描いた竜の絵に太い黒枠を描き、竜の口に口紅を入れました。竜はそれっきり姿を見せなくなったということです。

この絵は昭和30年ごろにはがれだし、保存しようとしたのですが、傷みが激しく、焼却したとのこと。

泊神社にまつわる昔話

さ2.7尺。

この灯ろうは、宮本伊織の寄進と伝えられています。

他の2基は、ほぼ前者と同一ですが、笠の部分に蕨手がなく、普通の屋根型です。「承応二曆三月吉日」の銘文があります。高さ1.65尺。前者と同時の造立であることが分かりますが、伊織の身寄りの者の寄進と伝えられています。

いずれも市内現存の石灯ろうとしては野口町・教信寺のものに次ぐものです。

## 文化財調査研究センター

名称が変わりました

加古川市教育委員会 教育指導部『生涯学習推進室 文化財担当』の名称が、4月から『生涯学習局 文化財調査研究センター』に変わりました。

また事務所も市役所から東加古川の総合文化センター(図書館)2階に移りました。

### 図書館(総合文化センター)2階に移転

〒675-0101 加古川市平岡町新在家1224-7

加古川総合文化センター東棟2階

☎ 0794-23-4088

FAX 0794-23-8975

Eメール bunkazai@city.kakogawa.hyogo.jp

(月曜日と第1火曜日は休館日です)

## 加古川市文化財保護協会に加入しませんか

会費 年間2000円

(中・高校生1000円)

◎文化財シリーズテレホンカード配布

◎文化財見学会・文化財講座の案内

保護協会入会のお問い合わせ

加古川市教育委員会

文化財調査研究センター

☎ 23-4088

